

日本占領下の東南アジアにおける日本語教育

—マラヤ、北ボルネオを中心に—

松永典子（九州大学教授）

上田：それでは後半の部の方に入ります。まずご登壇いただきますのは、松永典子先生です。簡単に紹介いたしますと、九州大学の比較社会文化で学位、博士号を2000年に取られています。その後、福岡工業大学社会環境学部の講師、九州大学大学院比較社会文化研究院助教授を経て現在、同研究院の教授になられております。主要な業績と致しましては、『日本軍政下のマラヤにおける日本語教育』（風間書店、2002）『「総力戦」下の人材育成と日本語教育』（花書院、2008）などの本を出版されております。ではお願いします。

松永：ご紹介いただきました九州大学の松永と申します。よろしくお願ひ致します。本日、「日本占領下の東南アジアにおける日本語教育」ということで、特にマラヤと北ボルネオを中心にお話をしていきたいと思ひます。

はじめに

ここでお話しますのは、1つ目は特に日本占領下のマラヤ、北ボルネオという、いわゆる多民族社会で、日本語というものが果たして共通語としての役割を果たしたのかどうかということも含めて、占領下の日本語を検討するという事。それから2つ目として、そういった多民族社会での言語接触、それから文化理解の場として、日本語教育がどういう意味付けを持っているのかということを検討するという事でもあります。マラヤと北ボルネオに関しましては、先ほどの後藤先生の地図の方にもありましたが、現在の地名で申しますと、マレーシアとシンガポール、それからブルネイといった3つの国を含んでいる地域ということになります。このマラヤ、北ボルネオは、日本の占領期だけに使用された、戦争の時代の特殊な用語ということになります。

私が、なぜマレーシアのことを調べているかと言ひますと、実は1991年から1993年に、青年海外協力隊の日本語教師としてマレーシアに派遣されたという経験があります。その時に、マレー人の中高等学校（男子校）で日本語を教えていたのですが、ある時中学生の生徒から、「先生、『ばかやろう』ってどういう意味ですか」と聞かれたのです。その時、本当にどこでこういった言葉を覚えたのだろうかとびっくりしました。「いえ、『ばかやろう』というのは、それは悪い言葉ですから使わないようにしてください」と言ったのですが、その生徒は「先生、でも日本人は戦争の時にマレーシアの人たちにその言葉を使ひましたよね」と言うのです。その時、私自身は日本がかつて東南アジアを占領していたというそのことは知っておりましたが、マレーシアの子どもたちがそのように克明に日本の占領期のことについて学んでいるということを知りなかつたわけでした。先ほど後藤先生のお話で、日本とインドネシアの教科書の日本占領期の記述の比率が8対1程度になるというお話がありましたけれども、私自身はその生徒と比した時に、恥ずかしい話ですけども100対1ぐらいのそういう割合でしか日本の占領のことを知りませんでした。その後日本に帰ひまして、この日本の占領期について、特にどういうふうひに日本語教育が行われたのかを知らなければならぬと考え、こういったことを調べることになっていきました。

国家的規模の対外的日本語教育

資料1では、日本が国家的な規模で日本語教育を進めていった、その概略をお示しして

いるわけなのですが、ここはご承知の通りのところでもあります。ただし、ここで申し上げたいのは、日本語教育というものが、日本の国力の進展とともにそれが推進されているという、そういう事実があるということです。台湾や朝鮮という植民地として日本語教育が行われた所では、文字通り国語教育という形で日本語普及が進められていったわけですが、先ほども出てきました南洋群島でありますとか、それから中国、これは関東州から始まって満州国、それから華北占領地までさまざま

資料 1 国家的規模の対外的日本語教育

- 台湾（1895～1945）：植民地としての統治
 - 朝鮮（1910～1945）：国語教育
- ⇕
- 南洋群島・ミクロネシア（1914～1945）
：委任統治「南洋庁」
- ⇕
- 中国：関東州・満鉄付属地（1906～1945）
：「満州国」（1932～1945）
：内蒙古、華北占領地（1937～1945）

な地域へ日本の国力が及んでいくとともに、日本語を普及していくことも行われていつているわけです。つまり、言語政策というものとの関わりもあると思いますけれども、日本語教育というのは日本の国力の進展と切り離せない、本質的にそういう関係性にあったと言えます。今日の国家的なさまざまな国際交流事業にも、日本の国力を推進するために、日本の文化やあるいは日本語を普及していく、あるいは発信していくということが行われており、そのような本質が国語教育、日本語教育の中にはあるのではないかとこのように思われます。

まず、日本占領下の東南アジアということについて簡単に見ていきたいのですが、日本の東南アジア占領は本質的には軍政による支配、統治でありました。今で言うとフィリピン、当時はビルマでしたが、今の国名ではミャンマー、それからマレーシア、インドネシアといった地域で、これも先ほどのお話と重なるのですが、資源、それから労働力を確保するために、ただし名目上は大東亜共栄圏を建設するという目的のもとに、その手段として日本語と日本精神の普及ということが行われていきました。

日本占領下の日本語教育

ここでなぜマラヤ、今でいうマレーシアという所を対象とするのかということなのですけれども、植民地とされた地域、それから占領地とされた地域、それぞれの占領政策や占領地の実情といったものによって、それぞれの日本語教育の性格というものも、非常に異なると言われています。東南アジアの方では、軍政の途中で独立が認められたフィリピンやビルマといった地域よりも、マラヤ、インドネシアの方が日本化の度合いが強いと言われていると思います。

さらに見ていきますと、インドネシアよりもマラヤの方が、相対的に日本語教育や文教政策が徹底して行われたと言われています。インドネシアは陸軍によって占領された地域と、海軍によって占領された地域とで、かなり占領の実情が異なりますので細かく見ていくとまた異なる部分もかなりありますが、大きく見た時にはそういうことが言えます。私自身はマラヤを中心に見ていまして、そこでは特に初期の段階では、植民地で行われたような国語教育、つまり、日本語を国語というふうに位置付けるような教育が行われている形跡があるのではないかと見ています。

そう申しますのは、一つは学校の名前です。軍政監部という日本の軍政を進めた機関がありまして、そこで「軍政監部国語学校」という教育機関がつけられた。その名前自体に日本語を国語と捉える意識が表れているのではないかと思います。さらにもう一つが教科書です。教科書は先ほどの後藤先生のお話の中にも、クラトスカ先生のお話の中にもあったのですが、マレー語で書かれたものや英語で書かれたもの、日本語で書かれたもの、さまざまな種類のものがあります。その中で、「軍政監部国語学校」で作られ、使われてい

た教科書は『国語読本』という名前でした。それが徐々に軍政が進むにしたがって、やはり日本に協力してもらうためには、国語という位置付けをするのでは、なかなか現地の人々の協力が得られないということもあったのだと思いますが、教育機関の名前も「日本語学校」、あるいは教科書の名前も『日本語読本』、というふうに変わっていています。

このように軍政の途中でもまた変化があるのですが、インドネシアと比べた場合にはマレーシアの方がやや、その日本化の度合いが強かったというふうに一般には言われています。それは先ほどのお話と重なる所ですけど、マレーシア、このマラヤについては永久に確保したいという、そういう日本の思惑があったということです。インドネシアとマレーシアは日本の領土としたいと日本軍は思っていたわけですけども、インドネシアについては1944年に独立を認めるというような方向性になりました。ただし、マラヤについては1945年の時点でも、まだ現地の民度が低いというそういった文書もありますけれども、永久に確保しようという思惑があったようです。地図で見た時に、マレーシアとそれから北ボルネオという所は、スマトラへとつながる海域の防衛の要衝にあたるという点も大きいのではないかと思います。特にシンガポールはさまざまな、軍事的、経済的、それから文化的にもこの東南アジア地域の中心に位置している所でしたので、非常に重要な地域だということに見られていたと思います。ただし、この日本化というなかで、当時の朝鮮や台湾といった植民地で行われたような教育勅語を教育の中に持ち込むといったことは行われておりません。

マラヤ・北ボルネオの特徴

次に、北ボルネオ、マラヤの特徴ということで見ていきますと、この2つの地域は日本が占領する前にイギリスに支配されていた、イギリスの植民地であったというところから、イギリスの思想的な影響が非常に強い地域でした。言うまでもなく、民族、言語、文化が非常に多様な地域でありまして、これを大雑把に捉えますと、マレー系、中国系、インド系。さらに北ボルネオの方では、この3つの大きな民族のほかに多数の少数民族、イバン族やビダユ族、それからカダザン族といった、そういった多くの少数民族も住んでいる、そういった地域でした。特に北ボルネオの方では公用語として、役所などで用いられていたのは英語でしたが、ただし、英語教育を受けられた人というのは少数のエリートに限られていたということもあって、マレー語と中国語も併用して使用されていたというのが実態ではあったようです。

日本による占領政策の重点ということで見えていきますと、まず、成人の場合は特にですが、イギリスの思想的な影響を払拭させるということ、それが最も大きい重点でした。それから中国系の反日的、抗日的な勢力を抑えるということも重要なポイントの一つでした。そのために、民族ごとに異なる政策、いわゆる分断政策というものが行われるのですが、それと同時に日本語を共通語にすることによって諸民族の統率を行うという、非常に矛盾した政策が掲げられました、もともとの大東亜共栄圏が持っている矛盾がここにあると思うのですが、日本語を大東亜の共通語にすると同時に、大東亜という大きな組織の一つの言語、現地の言語の一つを共通語にするという発想はここにはなかったわけです。ただし、インドネシアでは日本語と共にインドネシア語を共通語にするという、そのことが行われているので、それまで共通語がなかった民族の団結を促す、一つのナショナリズムを進める手だてにもなっていったというところはあったようです。

学校教育、社会教育、それから一般の人たちに対しては新聞やニュース、映画やラジオ、そういったメディアを使った宣伝活動として、日本語の普及というものがなされていています。ただし、マレーシアの中のそれぞれの小さな州ごとに、その政策が推進されていったということもあって、日本の軍政監部自体には、日本語を共通語とするという目的を達成できるような、強力なシステムというものはなかったというふうに思います。

また、現地のナショナリズムを喚起するといったような政策自体も、ここでは進められなかったとも言えるわけです。ただし、結果的に言えることとして、やはりナショナリズムというものを抑えつけられることによって、現地の人々はそれに反発する。それによって現地特有の文化に対する認識を深め、誇りを育むといったことが、戦後の民族独立運動につながっていったということをクラトスカ先生も御著書の中で指摘しておられ、この辺は共通認識ができていないところではないかと思えます。

マラヤにおける日本語教育

続いて、具体的にどういう教育が行われたのかということを見ていきます。特にマラヤで特徴的なのは、短期間で広い範囲に日本語を普及するために、いわゆる錬成教育というやり方が持ち込まれています。この錬成というのは、満州国などでもそういった方法論は用いられておりますが、短期集中で合宿をしながら日本精神を鍛えるという、日本の国内で皇国民の錬磨育成ということを目的として行われたトレーニングの方法です。これに、日本語を学ぶということが組み込まれていったわけです。

日本語教員自体が占領地では非常に少なかったということ。それから現地の教員も日本語に習熟しているわけではなく、広範囲に初等教育を進めようとするときには、やはり現地の教員を再教育していく必要性があったということ。それから教科書なども不足していたということ。そういう時間や人的・物的資源が限られていたという中で錬成という方法が用いられたということになります。また、学校教育は初等教育を中心に行われ、高等教育はそれほど発達しなかったわけですが、医科大学は占領の途中でできています。

それからもう一つ、実業教育にも力が入れていました。これは、軍政に協力してくれる要員を育成する必要性があったということで、公務員や青年指導者層を養成するために、例えば警察官、郵政、通信、鉱業、それから農業などですね。工業では「工業日本語学校」という学校もつくられました。それから教員の再教育も行われました。

この錬成教育の中で特に特徴的なのは、道場訓のような誓いの言葉を復唱させるという方法論が採られていたことです。その誓いの言葉の内容というのは各機関によって異なっており、「私たちは規律を守ります」といったような非常に簡単な道場訓の機関もありますし、天皇陛下の赤子として、私たちは日本のために尽くすというような、もっと踏み込んだ内容の誓いの言葉もあったりします。さらに軍隊のような教練や体操、それから農作業なども含めた作業などが行われているわけです。ただし、そこでは普通教育のように教科教育が網羅的になされていたということではなくて、日本語偏重の教育、しかも体で覚える・体得するということに主眼が置かれた教育方法でありました。これは、言うなれば日本精神の理解ということを狙いとしていたわけです。私が1990年代から2000年代の前半ぐらいで何人かインタビューした際に、一部の方は当時の誓いの言葉を覚えておられました。しかし、理解しているというよりも単にリピートしている、表層だけを繰り返している方もおられました。言うなれば、訓練を受けた大部分の人々にとっては、それよりも肉体的な訓練、その訓練によって身体が強くなって精神面も鍛えられたという、体得する、身体で覚えるということの方が、この訓練、錬成教育の中で行われた教育の、最も重要な部分ではなかったかと思われまます。

それを象徴するような写真があります。錬成教育機関の1つとして「ペナン訓練所」という所がありまして、これらの写真はそこでの訓練風景の一コマです。ペナンはご承知のように華人が非常に多い地域ということがありまして、特に思想的な面での訓練が強化された地域です。**写真1**は日本人の教官と一緒に写っている写真ですが、サーベルを持ったりしています。**写真2**は集合写真ですが、日本人の教官、軍人と一緒に写っておりまして、上から2段目の真ん中位にターバンをした方がおり、インド系の人でもマレー系の

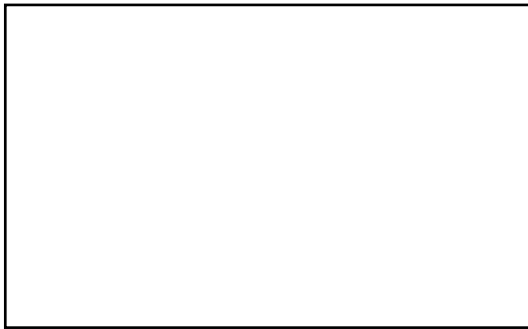


写真1



写真2

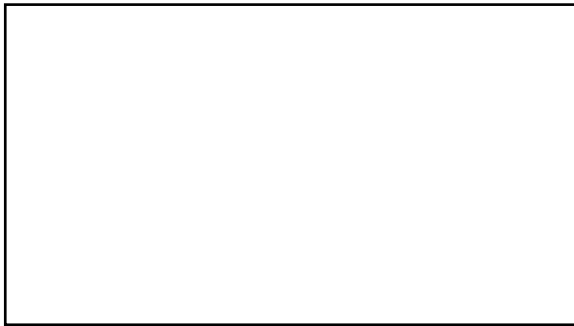


写真3

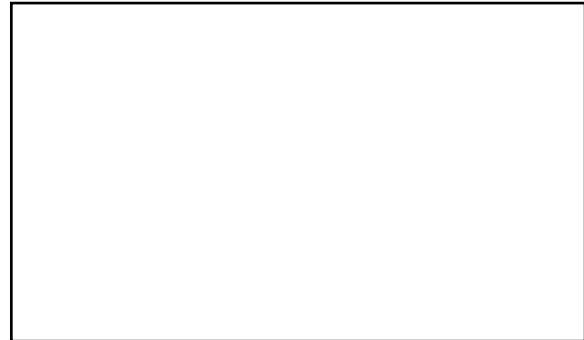


写真4

人、中国系の人と一緒に訓練をしているという、そういう写真です。矢印があるのはこの写真の提供者で、スリランカ人の方です。**写真3**が教室の風景です。**写真4**は運動場のような所で整列をして、教練を受けているものです。ここでは割愛しましたが、相撲をとっているような写真などもあります。

日本語学習・日本語教育の意味づけ

以上で見られるような訓練が行われていったわけなのですが、日本語学習、日本語教育というものをどういうふうに見ていったらよいのかという点で、ちょっとまとめていきたいと思います。学校教育の中では、先ほどからお話のあった宮城遥拝であるとか、ラジオ体操、唱歌といったものが行われています。繰り返しですが、教育内容は日本語偏重のカリキュラムで、体得することに主眼がありました。こういった点は、戦前にイギリスの支配下で高い教育を受けていた中国系の方からすると、特に無教育、愚民教育であったと一般的に評価されています。

日本語を学習することの目的は、人によってさまざまだったわけですが、多くの方は生活の糧を得るためだったと思われます。たとえば、官公庁では日本語の試験がありまして、その等級に応じて日本語手当として、お金の他にたばこの配給がありました。また、中国系の方は特に思想的なことを疑われると非常に困難な目に遭うことが多かったため、日本の軍人と意思疎通を図るためにも日本語を学ぶ必要があったという話も直接聞いたことがあります。そういう実利的な目的、就職のために学んだ人もいれば、公務員や教員は指示によって、あるいは選ばれて日本語を学べと言われた人もいたようです。また、当時は学校が開かれていなかったもので、開かれている学校へ行かざるを得ないという、就学を目的にした人もいました。ただし戦前、日本占領の前の初等教育は、無償だったのですが、日本の教育は無償ではありませんでした。このため生活が困窮してくるにしたがって、学校へ行ける子どもたちの数も減少したという問題があります。自らの母語を学ぶということについては、マレー系の学校ではマレー語も教科に入っている所もありますけれども、中国語などは禁止されていたので、母語への抑圧という問題もあります。そういう中でもう一つ、いろいろと話を聞いている中で、積極的に日本語を学ぶ意義を見出した人

たちも一部には存在していたことが分かりました。それは占領下で日本語を教えるなど何らかの役割を与えられて、それにより自分の能力を発揮し、活躍することができた、そういう人たちではなかったかと思えます。

それともう1点。先ほどから申し上げている錬成教育については、軍政監部がつくった「興亜訓練所」という錬成教育機関があります。そこで学んだ人たちを対象としたインタビューを行った明石陽至先生が言われていることなのですが、日本の教育が一部の青年指導者層には非常に大きな波及効果を与えていたという評価もあります。それは、この短期集中の合宿形式、寝食を共にするという教育の方法論が一つ大きいと思います。ここで評価している人たちが口を揃えて言うのは、日本語、日本の教育の方針が良かったとは思わないが、そこで行われていた日本的規律や精神教育、自らを律して国のために身を捧げるということについては良かったということです。こういった錬成教育が現地の青年指導者層の人間形成に寄与したという点については、私がインタビューした中で、「日本精神をたたき込まれたおかげで、その後の自分の人生がある。それ以降、どんなことがあってもびくともしない精神が鍛えられた」と語って下さった方もおります。

北ボルネオにおける日本語教育

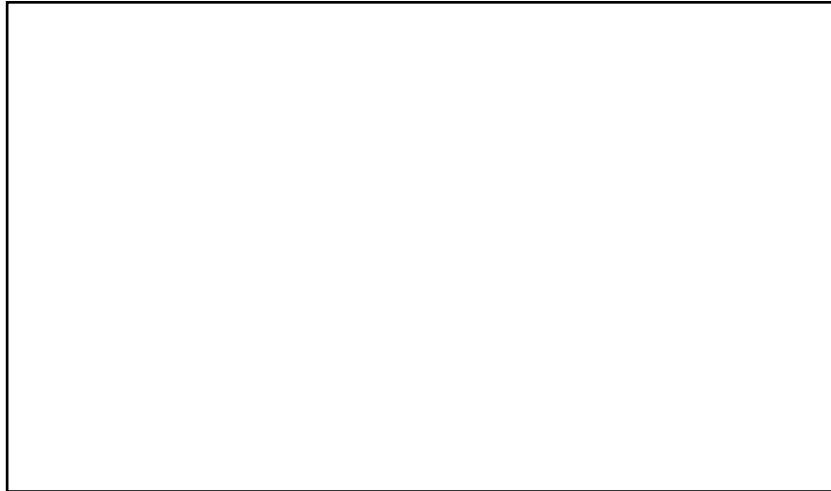
続いて北ボルネオにおける日本語教育ということでまとめていきます。相対的に日本軍政の波及効果はこの地域は小さかったというふうに言われています。研究もあまりなされていない地域です。というのは、ボルネオ守備軍という名前からも分かるように、海域の守備に重点が置かれていたということが実は大きいかと思えます。普通教育も極めて低調で、都市部は日本軍が押さえているけれども、森の中など、その周辺においてはなかなか掌握できていなかったということです。

一般教育、実業教育では必要最低限の軍政に協力する要員を養成することに主眼が置かれていました。また、先ほどと重なりますけれども、現地の教員も日本語の教員も教材も不足していたため、文字に頼らない教育というものが行われています。これは、他の東南アジアの地域も同じような教育の方法論だと思います。お辞儀をするなど儀礼的なもの、身体的な訓練、ラジオ体操、歌による日本語の普及、実務に即した会話教育というものが行われています。

資料2は北ボルネオ、クチンで収集した資料の1つなのですが、1944年の第二公民学校の成績優良の賞状と成績表です。それを保有していらっしゃる周国祥さんという方なのですが、日本人の血が混じっているとご本人は言ってらっしゃいました。**資料3**は「日本語教育振興会」という、当時の日本語教育を統括する日本側の機関で作られた『日本語讀本』という教科書です。**資料4**はクチンの図書館の倉庫の中で見つけました。海軍の占領地で作成されたテキストなのですが、マレー語で書かれています。**資料5**も海軍占領地で1944年に作成されている愛唱歌集。ただし、これらが北ボルネオで使われていたかどうかは分からないのですが、収集したのは北ボルネオです。**写真5**は北ボルネオのタワオという所での日本語学校の開講式の写真になります。これもインド系の人やマレー系の人、中国系の人、少数民族の詳細は分からないのですが、これらの多民族と一緒に学んでいると思われる、そういう集合写真です。

写真5 日本語学校開校式

資料2 賞状と成績表



資料3 『日本語讀本』

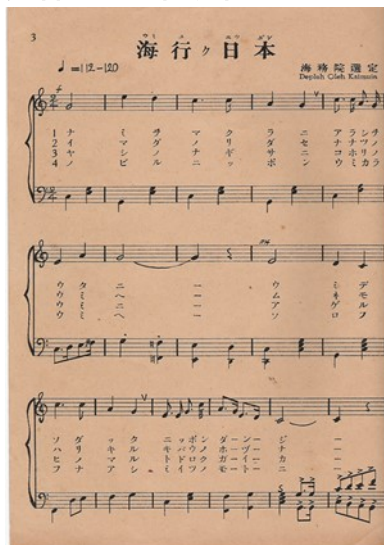


〔周国祥 所蔵〕

資料4 マレー語の教科書



資料5 愛唱歌集



日本語学習・日本語教育の機能

最後にこの日本語学習、日本語教育の機能ということについてまとめます。以上のような日本語の集中プログラムが行われたことによって、異民族間の言語接触、文化理解の場が増加したと言われていています。即ち、その土地の先住民族が政治に登用されたということ。そして、若者の交換プログラムがいろいろ作られていったということ。それには日本に国費留学生として留学した「南方特別留学生」というものも含まれます。インドネシアに派遣された人、それから北ボルネオの中でもミリにある軍事センターに派遣された人、そういう海域圏の交流というのが、ここで行われているというのは、一つ注目すべきところだと思います。

それから新しい組織づくりです。女性の教育というのが、イギリス統治の時にはあまり行われなかったのを、女性の組織をつくったり、文化活動が行われたりしています。そういう意味では、日本語はそれまで接触することがなかった人々を結びつける共通語として、言わば、多民族をつなぐ共通語として機能している。ただし、それは日本語を学ぶ場であったり、日本語を使う職場であったり、そういう活動をする場であったり、そういう限定的なものであったと思います。

もう一つ、その異民族の言語接触、文化理解の場が増えたということで、これも占領された地域では往々にして指摘されていることですが、その抑圧された人々が危機感を共有する機会になったことです。ブルネイで使用されている歴史教科書の中にも、北ボルネオでは日本の占領により、それまで意識されなかった新しい民族意識というものが芽生えているということが記述されています。つまり、日本語を学ぶ場、日本語を使用する職場、活動の場にはブルネイマレー、サラワク人、サバ人というそれまで意識しなかった民族意識、そういったものを喚起していく機能があったと言えます。日本側がそれを意図していたわけではなかったもので、それは間接的な機能としか言えないと思いますが、そうした機会につながっていったと思われまます。この点に関しては、オーストラリアの歴史学者・Bob Reeceも日本軍政には「中国系、マレー、イバン、ビダユ間の接触を著しく増大させ、戦前の労働者区分を崩壊させる波及効果」があったと述べています。

おわりに

最後に、当時の日本語教育というものは日本精神の普及という目的のために、日本の侵略戦争、日本のナショナリズムの扇動に利用されたという、そういう位置付けしかできないと思うのですが、ただし、その中で多民族をつなぐ共通語とし、限定的ではありますが機能していた。その一方で、日本語が共通語化されていくことによる危機感を、多くの民族が共有することによって、新たな民族意識を喚起していく機能も、これも間接的ですが、あったと言えます。ただし、残念なことに、東南アジアの多様な地域の多様な文化、言語を尊重するような、そういう視点というものがこの当時の教育にはなかったというところは押さえておくべきだろうと思います。これで、お話を終わります。どうもありがとうございました。

上田：非常に興味深い話でした。具体的な写真等もあり、なかなか印象的だったと思います。どうもありがとうございます。